〔生化学　第80巻　第5号，p. 381，2008〕

アトモスフィア

市民に植え付けられた誤った知識を正すために

中　川　八　郎*

研究の第一線を退いてから，TVを観たり，雑誌類を読んだりする機会が増えた．それらの画面や紙面には，こんなに科学的根拠に乏しいことがまかり通ってよいのか？と首を傾けることも多い．

どの学会も，発表された成果や，関係諸科学の進歩を，公開講座などを通じて一般市民に解説し，それらの知識の普及に努力を続けられていることに敬意を表したい．しかしその反面，上記の番組や記事を真実と信ずる一般人の増加が，諸学会のこれらの努力をはるかに上回るのを看過してよいことではない．とくに多い健康に関する諸問題の根底には生化学が関与しているので，本学会としては，もう一歩踏み込んだ啓蒙活動をする必要があるのではないかと思う．

科学的根拠に乏しいにもかかわらず，それがもっともであると一般人に受け取られる理由の一つは，番組企画者や筆者たちの知識が，一般の視聴者や読者に近いために，彼らに受け入れられやすいことにあろう．糖尿病だから糖を含まない食事を与えればよかろうと，苦労して一流ホテルのシェフと協同して作り上げた医者を名医として紹介しているTV番組にその一例を見ることができる．この名医が迷医であることは生化学の知識があれば明らかなことである．

糖尿病では主として肝臓でアミノ酸などからグルコースを合成する機能，つまり糖新生が著しく増加するので，糖を食べなくとも，体タンパク質を分解し，遊離してきたアミノ酸からグルコースを合成する．この体タンパク質の分解亢進が糖尿病の病態の特徴の一つでもある．

同様の誤解は最近発行された月刊誌の医師の談にも見られる．ここには脂肪に対する認識不足もある．「名医に問う」を売り物にしているので，多くの読者にこの誤解が蔓延することを恐れる．

一般の人々は，食べたタンパク質がそのまま身体に取り込まれて作用すると考えがちで，TVでコラーゲンを食べてお肌がつるつると宣伝されると，女性は迷うことなく飛びつく．コラーゲンもタンパク質で，食べても消化管でアミノ酸まで分解され皮膚まで届かないことはまったく理解されていない．

試験管内で血栓を溶かしたから，その原動力になっている酵素が存在する納豆を食べると動脈硬化の予防に役立つという有名なTV司会者がいえば，試験管内現象がそのまま体内でも再現すると視聴者が思い込んでも不思議ではない．この酵素（命名法にも問題がある）がタンパク質であり，食べた後の運命について彼は知る由もない．「もしこの酵素が身体の中に入ってくると，あなたの身体は溶けてしまいますよ」といっても，一般の人々は有名なTV司会者の方を信用する．この司会者の名を冠した症候群はいまや流行病となり，その対策に医学界は頭を抱えている．

膜は一般の人々の意識から遠い存在のようである．ましてや，血液・脳関門となると理解の範囲を越えているので，消化管を通過した物質はすべてそのまま脳に到達すると考える．一般的に言って，神経伝達物質は食べても注射しても脳には入らない．一度に大量に，あるいは多種類の神経伝達物質が入り脳に混乱を生じさせることを防ぐために，血液・脳関門でそれらを破壊し，輸送を妨げるからである．抑制性神経伝達物質であるギャバが実際に脳に入るとうつ病のような状態になる可能性があるが，幸いなことに破壊される．

このような誤解の例をあげればきりがない．誤解が誤解ですめば問題はないが，効果のないものに投資するのはばかげているし，健康を害し世界一の長寿国をその地位から凋落させる恐れが十分ある．

本学会では市民公開講座を続け，学問の進歩を紹介する努力を続ける一方で，インターネットを介してこうした誤解を正すことに取り組むことも必要ではなかろうか？　これに対応する委員会は，研究の第一線にある人々の手を煩わせる必要はなく，筆者のようなOBを動員すればよい．

活字になるものは最終的に点検できるが，TVは出演者の意図にかかわらず，出演者に無断で，企画者の意図で編集されることが多い．これが，専門家に不名誉な結果をもたらすことにもなる．また，電話で長時間拘束して意見を聞きながら謝礼も払わないことも少なくない．出版業界と異なって，知的財産権を尊重するモラルが確立していないTV業界に対して，会員の名誉と利益を守ることも，関係諸学会が連携して物申す時期に来ているし，科学番組で利潤を得る側の意識を高めることにもなると思われる．

*大阪大学名誉教授，本会名誉会員